

## 第1章 馬頭町の四美術館

### 第1節 栃木県那須郡馬頭町の概要

2001年1月現在の人口は女性7,142人男性7,072人の合計14,214人である。国勢調査の結果によると1960年の20,584人をピークとして減少傾向にある。山林面積が73%、人工材率は約70%であり、「那珂川連邦共和国」の一つでもある自然が豊かな町である。日本最古の産金地であり、東大寺大仏に使用されている。栃木県東部に位置し茨城県大子町と接している。江戸時代は水戸藩に属しており昭和40年代まで主産業であった煙草、小砂焼・馬市・こんにやくなどが推奨されていた。主な観光資源は美人の湯で名高い馬頭温泉郷・小砂焼・美術館・蕎麦などである<sup>(註1)</sup>。統計指標の特筆点としては2000年度の老年人口構成比(65歳以上)が栃木県内49市町村中5位、昼間流入人口比率47位、1997年から1999年の財政力指数(基準財政収入額/基準財政需要額)が47位である<sup>(註2)</sup>。

### 第2節 馬頭町の美術館

#### (1) いわむらかずお絵本の丘美術館

1998年4月25日に開館した。「14匹」シリーズなど小動物を主人公に身近な自然の魅力を描き世界各国で人気の絵本作家いわむらかずおさんの美術館で、テーマは「絵本・自然・子ども」である。いわむらかずお絵本の丘美術館、えほんの丘フィールド、えほんの丘農場からなる。美術館のティールームからは筑波山や那須高原と言った山々や那珂川、田園風景が一望出来、来館者が美術館周辺の自然に触れられるように隣接する「えほんの丘農場」へ遊歩道でつながり、畑や牛舎巡りも出来る「フィールド・ミュージアム」となっている。美術館は地元の杉材を使用した木造建築でハートビル法認定のバリアフリー建築である。室内の温度調節には太陽熱を利用したOMソーラーを採用し下水は高性能の合併浄化槽を設置している<sup>(註3)</sup>。1999年には木材利用推進中央協議会主催の優良木造施設推奨審査で林野庁長官賞を受賞している<sup>(註4)</sup>。えほんの丘フィールドは雑木林、田んぼ、畑からなり沢山の生物が住んでいる。散策道、あずま屋、広場など子どもたちに自然の素晴らしさを知ってもらうために栃木県の子育ち子育て総合支援事業の指定を受けて1997年と1998年で、総事業費1億160万円をかけて馬頭町が栃木県の「子どもの森」構想の一環として整備した<sup>(註5)</sup>。えほんの丘農場は美術館の趣旨に賛同し、観察・体験農場として場を提供している佐藤幸男さんの農場である。約4ヘクタールの畑の作付けと和牛15頭の飼育を行っている。運営スタッフ数は8から12名程度で季節等諸事情により変わり、館長以外は常勤である<sup>(註6)</sup>。企画展は年に3、4回開催され他に月2回の朗読会、佐藤さん指導による種まき・草取り・稲刈りなどの農業体験イベント、自然観察会、講演会などを開催している。いわむらかずお絵本の丘美術館後援会の会員である町民有志のボラ

ンティアの方々は 110 名前後おり、町外在住者も含まれている。「えほんの丘農場」を開放している佐藤さんに代表されるようにボランティアの活動内容についてはそれぞれの技術や能力を発揮できるものとなっている。後援会員と友の会員が共同で草刈などのイベントを行うこともある<sup>(註7)</sup>。

## (2) 馬頭町広重美術館

2000 年 11 月 3 日に開館した。名称は栃木県民と馬頭町出身者を対象とした一般公募により決定した。歌川広重の肉筆浮世絵・版画、小林清親を中心とした明治版画、川村清雄作品など青木藤作氏のご遺族から寄贈を受けた青木コレクションを中心とする馬頭町の町営美術館である。美術館の設計デザインは隈研吾氏によるもので高齢者、身体障害者が利用しやすいようにバリアフリーとし、ハートビル法の認定施設となった。建物はゆったりとした平屋建てであり屋根と庇を出来る限り低くすることにより周りの景観から突出せず町の自然に溶け込むように配慮されている。そのため大屋根を用い、美術館全体を格子状の木材(地元の八溝杉材を利用)で取り囲んでいる。これは広重の方法を応用して美術館自体が自然のセンサーになるような建築づくりを目指したものである。また、木材をはじめ床に白河石(芦屋石)、壁に烏山和紙と美術館内外の仕上材のほとんどに地元産の素材を用いるなど地域性や歴史、地場産品の振興にも配慮されている。2000 年には木材利用推進中央協議会主催の優良木造施設推奨審査で林野庁長官賞を受賞している<sup>(註8)</sup>。

浮世絵はその特性上、長期間展示することは難しく、3 週間ほど展示したら一年以上休ませる必要がある。そのため浮世絵の常設はありえず、馬頭町広重美術館では年に十回ほどの企画展を開催している。その魅力的な企画展づくりが功を奏したためであると思われるが、平成 2002 年 9 月には開館 3 年目を待たずに入場者 20 万名を突破した<sup>(註9)</sup>。これは栃木県立美術館の 2000 年と 2001 年の利用者総数を合計した 11 万 5162 名と比較するとおよそ 2 倍である<sup>(註10)</sup>。運営スタッフ数は囑託の館長、事務 3 名、学芸委員 3 名、非常勤の受付 1 名、友の会事務担当者 1 名の 8 名である<sup>(註11)</sup>。

## (3) 窯業史博物館ともうひとつの美術館

### 窯業史博物館

1978 年、日本窯業史研究所付小砂焼窯元、国山窯に小砂焼資料館として開設された。その後 1984 年に同敷地内の峰林館(展示即売処)の二階に窯業史博物館を開設し、1995 年に別途本館を開設し峰林館二階を別館として開館した。窯業史研究の第一人者大川清博士の長年にわたる研究資料を中心に公開した考古学博物館で常設展では古代の土器をはじめ全国各地の陶磁器資料を展示し、特に明治から昭和にかけて駅弁と共に販売された汽車土瓶・汽車茶瓶の展示は日本一である<sup>(註12)</sup>。

### 「もうひとつの美術館」

「もうひとつの美術館」は 2001 年 3 月に閉校となった小口小学校の校舎（明治・大正時代の建築物）を利用した 2002 年 8 月に開館した馬頭町で最も新しい美術館である。様々なバリアをかかえている人たちの芸術活動をサポートし、誰もが表現活動の楽しさを感じることが出来る場として活動する美術館である。10 月には特定非営利活動法人の認証を受けている<sup>(註13)</sup>。月に 2, 3 回のワークショップが開かれており、12 月 1 日に開催された「音」をテーマにした演奏会は好評であったと言う。

ボランティアは町内外の参加者がおり、近隣の大田原市ある国際医療福祉大学にはこの美術館のボランティア活動を行うサークルがある。また、小砂焼の藤田製陶所も活動に協力していると言う<sup>(註14)</sup>。

---

(註1) 2001 馬頭町勢要覧統計資料編。

(註2) 栃木県統計指標ふるさとウォッチング平成 13 年度版。

(註3) いわむらかずお絵本の丘美術館パンフレット。

(註4) 下野新聞 2000 年 7 月 14 日付。

(註5) 下野新聞 1997 年 12 月 26 日付。

(註6) いわむらかずお絵本の丘美術館へメールにて問い合わせ。

(註7) 2002 年 12 月 11 日いわむらかずお絵本の丘美術館後援会長桑野さんへインタビュー。

(註8) 馬頭町広重美術館ニュース準備号『風の色』。

(註9) 『広報ばとう』2002 年 10 月号。

(註10) 栃木県立美術館年報 28 号, 29 号。

(註11) いわむらかずお絵本の丘美術館へメールにて問い合わせ。

(註12) 栃木県博物館協会編『とちぎの博物館・美術館』(下野新聞社、1999 年)。

(註13) もうひとつの美術館構想。

(註14) もうひとつの美術館へ電話にて問い合わせ。